

宮沢賢治の文学と残酷さ

立命館大学名誉教授

西 成 彦

1. 『注文の多い料理店』から100年め

一年ほど前、深田さんの方から今回のご依頼をいただきまして、なんとも光栄な話と思い、喜んでお引き受けし、早めに出すようにと言われて、悩んだ末に絞り出したタイトルが「宮沢賢治の文学と残酷さ」でした。この「残酷さ」という言葉に違和感をおぼえている方がいらっしゃるかもしれません。宮沢賢治を愛する方々は「残酷さ」を求めてその作品にふれておられるわけではないでしょうから、それは当然のことです。しかし、本日の大僧正の講話にもあったように、なるほど宮沢賢治は世界の平和を夢見、だれひとり喧嘩や訴訟など起こさないような世界を夢見てはいました。ただ、それは現実がそうでないことはよくわかっていたからこそ、賢治は賢治でありえたのです。それで、その暗澹として、血なまぐさくもある現実の中で、心の闇を抱え、縮こまりながら生きるしかない（さきほど大僧正は「窮屈さ」という言葉をお使いになりましたね）人間が救いを求めるとした時に、仏の力が求められてくる。宮沢賢治は「残酷さ」が蔓延する世界の中からこそ生まれた詩人であり、作家であり、思想家だったのです。



宮沢賢治は1933年、昭和8年に亡くなっていますから、今日の法要は92回忌ってことになっていましたけれども、今年が2024年、とすると100年前は1924年です。宮沢賢治を愛される皆さんですから、もうお気づきかと思えますけれども、『春と修羅』と『注文の多い料理店』が出たのが1924年の春と秋でした。今年ちょうど、その2冊の本が出た年から100年めなのです。

2. 童話に込められた作者の「胸騒ぎ」

ぼくは比較文学を専攻していることもあって、世界の文学を広くカバーしながらやっており、今年フランツ・カフカについて今までに書いてきたものをまとめて『カフカ なまもの』（松籟社）という本を出したところでもあります。じつは、カフカが亡くなったのがまさに1924年でした。彼が残した中に、「雑種」という小品があります。主人公は、お父さんが可愛がっていたペットを譲り受けた。そのペットは不思議なペットで、半分が猫のようで半分は仔羊のよう。猫を見ると逃げ出すし、羊を見ると追いかけてくなる。そういう二つの胸騒ぎを持っていて、二つの胸騒ぎを抱え込んでいると心臓がはちきれそうだってところで使われているのが、ドイツ語ではエンク(eng)、つまり窮屈なんです。心臓に二つの動物の心を宿してしまうと、もうドキドキしてかなわない。そういう短編をカフカが残しているんです。これはやはりカフカであれ賢治であれ、あるいは多くの作家たちがさまざまな心や悲しみや喜びや怒りやそういった感情を一つの作品の中に閉じ込めようとする時も、本当に弾けそうな、そういう「心臓」が出来上がるわけです。そういう「はちきれそうな心臓」に触れる喜びが、文学を研究する楽しみであり、苦

しさでもあるという風にぼくは思っていて、それは宮沢賢治を読む場合でも同じだろうと思うんです。

その苦しさは、そこから解放された際の安堵を予想させますが、その安堵へとたどり着くまでは、いつでも刃物を突き付けられたような、そういう恐れに満ちた人生と背中合わせになっているわけで、宮沢賢治の文学を読むときに、またそれを子どもに読ませる時にも、やっぱり人生というのがいかに重たいものであるかをどう伝えるか、というところにその本領が発揮されるのだと思います。

3. 童話の歴史的役割—教訓—

ぼくが最初に宮沢賢治に触れたのは、中学生の時でした。「オッペルと象」（「オツベルと象」）が教材に出てきて、皆さんもご存知だと思いますけれども、最後にオッペルは「くしやくしや」に潰されてしまうんですね。ペしゃんこになったところで、あっけらかんと笑ってられる人がいるかも知れませんが、しかし、何故あれだけ優しくかった象が豹変しなければならなかったかを考えると、やはり世の中の階級問題の根深さというか、搾取、使役、奴隷制、そういった問題というのが、あの結末を引き起こしている。そういうことを中学生なりにわかったつもりでいたわけです。

童話というのは決して子どもだましなんかじゃない。つまり、世の中の大変さを子どもにちょっとずつ小出しにしているのが童話だと思うんですね。

「ヘンゼルとグレーテル」という有名なグリム童話がありますが、ぼくは「食と文学」ということで授業の中でもよく取り上げます。ヘンゼルとグレーテルもまた、自分たちが食べられそうになって、やむをえず復讐するわけですね。しかも、あそこにはそれこそ飢饉で家族全員を養うことが出来なくなったときに、両親が、自分たちが生き抜くためにはもう子どもを捨てるしかないと思いつめ、子どもを捨てに森に連れていくわけです。ところが、その森に連れて行くときに、パンを持たせるんですね。パンが足りなくて子どもを捨てに行くんだから、そのまま捨ててくればいいのに、これもまたある種の親心かも知れません。ところが子どもたちはパンを食べてしまわずに、そのパンをまき散らして帰り道の目印にしようとする。ところが運命は残酷です。そのまき散らしたパンくずは森の小鳥が食べてしまう。そういう小刻みな展開から話は始まっていて、子どもが、あるときは捨てられるかも知れない、あるいは魔女に食べられてしまうかも知れない、でも、それでも何とか生き延びるというお話ですね。

「ヘンゼルとグレーテル」の童話というのは、面白おかしく語られていますが、いかに人生が過酷なものであるかを大人から子どもへと伝えていく。まだ、学校も学校教育も何もなかった時代に、お爺ちゃんお婆ちゃんが、孫に教えられることと言ったらそういうことしかなかったわけですね。

宮沢賢治は近代日本の作家ですから、そういう「ヘンゼルとグレーテル」であったり、あるいはアンデルセンの「人魚姫」であったり、そういったさまざまな西洋童話からヒントをもらって、まさに人が生きのびるということの厳しさを、子どもにもわかるようにかみ砕いて説く、というやり方を試してみ、それでまず自分でも納得がいくものとして出来上がった作品を並べたのが、『注文の多い料理店』でした。

4. T・S・エリオットの「四月は残酷な月」

それから、今回の講演で「残酷」という言葉をタイトルに用いたもうひとつの理由は、『森のゲリラ 宮澤賢治』（平凡社ライブラリー、2004）に「山男の四月」に関する一文を収めてあるのですが、日本で「四月」といえば、

入学式のシーズンで、タイミングが合えば桜の花も咲いて、というのは、じつは明治の半ば以降、大正時代にかけて、ようやく慣例となっていったもので、その理由は会計年度に合わせたとか、徴兵制の施行と関係があるとか、いろんな説明がなされているようですが、宮沢賢治は、四月入学の時代が生んだ作家でした。そして、四月は冬の寒さから人々が解放されて、草木も芽吹き、動物たちも冬眠から覚めて、これから人生を謳歌しようとする、それが春だ

四月は残酷な月 (T・S・エリオット)

April is the cruellest month, breeding
lilacs out of the dead land, mixing
memory and desire, stirring
dull roots with spring rain.

— T.S. Eliot, *The Waste Land* (1922)

っていう風にイメージが強い。教科書の「サクラガサイタ」、唱歌の「春が来た」、みなそうですね。

ところが、T・S・エリオットという、後にノーベル賞を獲ることにもなる英語圏詩人が、*The Waste Land* という有名な詩を書きます。日本では『荒地』と訳されて、特に第二次大戦後の焼け跡の中で、日本の現代詩に大きな影響を及ぼすことにもなる。エリオット自身は、第一次大戦が終わった後のヨーロッパで、1922年にこの詩を残しているんですが。

そこにこうあります。

April is the cruellest month, breeding

Lilacs out of the dead land, mixing

Memory and desire, stirring

Dull roots with spring rain.

Winter kept us warm, covering

Earth in forgetful snow, feeding

A little life with dried tubers.

四月は一年のなかで一番残酷な月だ、産み出すから

死に絶えた大地からリラの花を、かきまぜるから

記憶と欲望を、かきたてるから

けだるい草の根に春の雨を注いで

冬はぼくらを温かくいておいてくれた、覆いながら

忘れやすい雪で大地を、養いながら

小さな命を乾いた球根の栄養で

こんなふうが続いていくのですが、四月は十二ある月の中で一番残酷な月である。つまり、死に絶えた大地からライラックの花を芽吹かせて、そしてなまくらになって生きる気も失ったような草の根に、春の雨を注ぎこんでかき混ぜる。そういう春は冬の眠り、つまりある種の安寧、あるいは冥福と言っても良いのかも知れませんが、つまり死後に我々が期待しているような穏やかな、安静な暮らしてという風なものなかに、もう一度、「春だ さあ起きろ」と言っている。それがハードだっていうわけですね。だから四月は残酷だ。

ものすごく皮肉な詩だと思います。そういう春が来るからこそ、人生は人生であるわけで、春が来なければ死に絶えたまま、ずっとそこに横たわっているしかないわけなんです。そこをエリオットは逆転させるんですね。埋葬

された死体をいまさら鞭打ってどうするのか、とでも言わんばかりに。

5. 戦後処理の難しさ

ヨーロッパでは第一次世界大戦が1918年に終わったとされていますが、イギリスもフランスもロシアもそれは消耗戦でした。それこそ何百万人っていう戦死者だけでなく、市民も巻き添えにされたような世界戦争が繰り広げられて、しかもその後のロシア革命がおこった結果、大量の難民が東から西へと押し寄せてくることになるわけです。

『荒地』には、突然、「私はロシア人じゃない、自分はリトアニアから来たんだ、本物のドイツ人」だとドイツ語で話す亡命貴族の言葉が出てきたりします。戦争が終わったといってもそれで世の中に平和と安定が戻るわけではなくて、ヨーロッパ諸国は、戦後処理にとっても苦しむわけです。戦後処理はまかり間違うと、ナチスのような排外主義が台頭して東からやってくる難民たち、あるいはユダヤ人を抹殺するような、そんな市民社会が出来上がってしまう。そういう実例を示してくれたのが、第一次世界大戦後のヨーロッパでした。

そんな中で、この時期に何より国土全体が不安定化した地位のひとつがウクライナだったので、ちょっと寄り道になるかもしれませんが、少し時間を頂きます。

6. 戦争の終わりあるいは和平—ウクライナの混乱—

第一次世界大戦は1914年、日本の元号で言えば大正3年7月に勃発します。オーストリアの皇太子がサラエボで銃撃され、それに対する報復でドイツとオーストリアがセルビアとロシアに対して宣戦布告する。そしてヨーロッパ戦線は甚大な被害を出すことになります。

しかも、加えて東部戦線は思ってもいない結果をもたらします。ご存知の通り、1917年の2月、ロシア皇帝を権力の座から引きずりおろして、プロレタリアの独裁国家を目指す革命がおこるわけです。そして、西部戦線では、アメリカが参戦してドイツとイギリス、フランス、アメリカがしのぎを削っていた同じころ、ロシアの新政権はむしろドイツとの講和を考え始めます。また、その時期、ウクライナの民族派は「ロシアがつぶれた今こそ」というので、さらに機先を制してドイツと講和を結ぶんです。ドイツと講和を結ぶことでウクライナの独立を夢見たわけです。すると、レーニン側は「これはいかん、先を越されたら困る」と1ヶ月後に今度は独ソ間の講和条約が結ばれて、この時からウクライナとボリシェヴィキ化したロシアの間で主導権争いが始まる。ドイツ軍との講和がありましたからドイツ軍の武器はロシアとウクライナが争奪戦です。そんな経緯があって、結果的にウクライナは内戦状態になります。そして、ロシア革命の影響は、シベリアにまで及ぶわけです。これに対する防波堤を築こうとしたのが「シベリア出兵」なんです。

満州利権を虎視眈々と狙っていた日本は、アメリカ以上にこれには熱心で、1918年8月11日に日本軍はウラジオストックに上陸します。何度も言いますが、第一次世界大戦が終わるのは同年の11月なのですが、アジアではこの時点で逆に新しい戦争が火ぶたを切ったといっても言い過ぎではない。ソ連の拡大をどうやって阻止するかという、日本側の外交政策、軍事政策がどんどん進行していくわけです。そういう時代だったわけです。

そういう歴史をちょっと振り返ってみてもわかると思いますが、戦争は実際に武器を使ってドンパチやるわけですが、戦争が終わるってことは、その武器を使うことを止めてそこに置くことだけでなく、何らかのもう一つの大きな力によって戦争を抑え込むということを意味するんですね。今、日本が平和国家と言えるのも、武器を抑え込

む力が一応まだ機能しているから平和でいられるのであって、抑え込む力がなかったら、なかなかやはり平和を意識することは難しいでしょう。英語では「pacification (和平あるいは平定)」と言いますし、PKOということばはご存じでしょうが、PKOとはpeace keeping、要するに「平和を維持するための軍事組織」ですね。

次の地図は、さらっと見ていただければと思いますが、当時のウクライナ民族派は、独立国家を樹立するために可能な限りの策を講じます。第一次大戦全体の終結をめぐって、パリで開かれていた講和条約にも、自分たちはこんなウクライナを望んでいるんだと、この地図を用意して臨みました。これは、今のポーランドやスロバキアあるいはロシアのグルジアの一部も含んでいる、かなり大きなウクライナを提案しています。いまあらためてウクライナがロシアに対峙するなかで、そうした百年前の夢をいくばくかでも実現しようとしている。そういうふうにも言えます。ウクライナの主権を獲得するには西欧世界の承認が必要だ。まさにパリ会議に臨んだウクライナ中央政府のビジョンそのものですね。

7. 賢治文学とシベリア出兵

そして、それと同じころ、日本のシベリア派遣軍はバイカル湖畔のイルクーツクまで侵攻しています。そして一帯には半島から奥地へと食い扶持を求めて移動した朝鮮人、また韓国併合以降には半島からシベリアで軍事組織を固めようとした朝鮮人のナショナリストたちも潜伏していました。日本軍は、そうしたコリアンの掃討にもエネルギーを注ぎ、かなりの数の朝鮮人が殺されました。関東大震災の時に似たようなことが起こりますけれど、それは一連の流れの中で起きたことだ、ということが出来ます。宮沢賢治が『注文の多い料理店』に収められる作品群を書いていたのはそういう時期なのです。

日本は第一次世界大戦にちゃっかり参戦しています。日英同盟を口実にして、「青島ビール」でも有名な青島にドイツの租借地がありましたから、そこに進駐し、さらに同じくドイツ領だった今のパラオを中心とするミクロネシアの島々にも海軍が差し向けられて、日清・日露に次ぐ、領土拡張の夢を現実化していったのです。そして、シベリア出兵でいっそう軍は勢いを得るのです。

1918年の春だったと思いますが、宮沢賢治は徴兵検査を受けましたが、体があまり丈夫でなかったこともあってハネられてしまいます。余談ですが、実は同じころ、フランツ・カフカもオーストラリア軍に従軍しようと試み、しかし、同じく病気ではねられています。そんな敗北感・劣等感を身に覚えたところも賢治とカフカとは似ているように思うのですが。

そして、1918年というと、シベリア出兵に要した軍需品の中にコメが含まれていて、今も日本はコメ不足が話題になっていますが、その当時もシベリアにたくさんお米が送られた結果、都市部でお米が足りなくなって、いわゆる米騒動が日本各地で起こる。先頭を切ったのは富山でしたが、そんな庶民の政治行動の過激化があって、まかりまちがうと Kommunismus が日本に波及するかもしれない。労働運動が強まるかも知れない。さらには朝鮮人の民族派は、一気に赤色化するかも知れない。そういった恐怖心が日本の中に目覚めて、その翌年に、東京で起草された朝鮮の独立宣言が、三一独立運動へと繋がっていった。そういう時



講演風景 延暦寺会館 2階講堂

代でした。

そんな中、宮沢賢治は、従軍はかなわなかったけれども、それならということで別の道を歩もうとするわけです。宗教活動もその選択肢のひとつでしたが、詩や散文の創作もその別の道の重要なひとつでした。

『注文の多い料理店』に含まれている中でも一番早い時期に書かれた作品に「月夜のでんしんばしら」と「鳥の北斗七星」があります。これは両方とも非常に軍国主義的なイメージが強い作品です。これが書かれた1921年は、2月になると、青森の弘前に拠点を置く第八師団がシベリアに派遣され、宮沢賢治は岩手から出征していった兵士たちを盛岡の駅頭まで見送りに行っています。

日本海を渡ってウラジオストックからシベリアにわたった軍隊もあれば、宗谷海峡を渡ってサハリンに向かった軍隊もあります。そういうものを横目に見ながら、彼はどこか「北方志向」の強い童話を書いていたことになるんです。

8. 『春と修羅』出版の背景—世界史的な出来事と妹トシの死—

もう一つが、妹のトシです。詩の「永訣の朝」ならどなたもご存知だろうと思いますが、彼女、トシは東京の女学校に行っていましたが、そこで発病してやむなく岩手に戻ってきます。賢治は非常にかいがいしく看病していたわけですが、その彼女が亡くなったのは1922年11月27日です。

そして、翌年の1923年4月に、今度は工兵隊がサハリン（樺太）に送られます。シベリア出兵そのものは1922年には終わるんですが、サハリンの南部は、日露戦争の後に日本領になっていたのですが、北部の石油利権を失わないために北サハリン＝北樺太の軍事占領は1925年まで続きます。そういうことで、この時期にも日本は北方へと兵力を送り込みつつけていたんです。そういった空気の中、宮沢賢治は勤務先（県立花巻農学校）の職務の名目でサハリン（賢治はいつも「サガレン」と書いています）に渡るんですね。生徒たちの就職先として、製紙工場が有望な就職口のひとつだったからです。しかし、賢治はその公務を、個人として、詩人としては、別様に意味づけるんですね。妹のトシが北の方へと渡っていった。だったら、その旅はトシに会いに行く旅としても意味づけられる。

そして、あの有名な「オホーツク挽歌」の連作が誕生するんですね。1923年7月のことでした。つまり、世界史的な大きな出来事と、宮沢賢治の中で起こった家庭内の悲劇、その二つが背景になって、満を持する格好で完成したのが、詩集の『春と修羅』であり、さらに今度は童話集の『注文の多い料理店』がその年の暮れに出ることになるわけです。

ということで、ここからが本題ですが、以下は『注文の多い料理店』のいくつかの作品を「残酷さ」との関係でみていこうと思います。

9. 『注文の多い料理店』の収録童話に見える「残酷さ」

① 「月夜のでんしんばしら」

まず、「月夜のでんしんばしら」です。この絵は賢治自身が描いた絵として有名ですね。この童話はこう始まります。「ある晩、恭一はごうりをはいて、すたすた鉄道線路の横の平らなところをあるいて居りました」。いかにも教育者と言った感じの書きっぷりで、線路の砂利の上を歩いていたら叱られるぞ、と子どもに言っているわけです。

そういう宮沢賢治は茶目っ気があるんですね。すると「とつぜん、右手のシグナルばしらが、がたんとからだをゆすぶって、上の白い横木を斜めに下の方へぶらさげました。そして、ぐわあん、ぐわあんとなっていたでんしんばしらの列が大威張りで一変に北の方へ歩き出しました。北の方へというのはたまたまではなく、北の方へ軍隊がどんどん送られていったという時代が背後にあるわけです。「みんな六つの瀬戸物のエポレットを飾り」——エポレットというのは軍人がここに着ける飾りですね。肩章ってやつです。

そして、「てつぺんにはりがねの槍をつけた亜鉛【とたん】のしゃつぽをかぶって、片脚でひよいひよいやつて行くのです」——片足に線を引いておきましたけど、ぼくは宮沢賢治はアンデルセンの影響をととても強く受けていると思うので、皆さんもご存知かと思いますが、「すずの兵隊」「なまりの兵隊」といわれる有名な童話がありますね。男の子が誕生日のプレゼントに錫の兵隊を箱入りでもらう。ところが開けてみると、一体だけ脚が一個しかない形体が混じっていた。つまりすずの兵隊を作る工程で錫が足り



月夜のでんしんばしら 賢治画

なくなって、一体だけ脚が一本になってしまったらしい、という風に始まる。その片方しかない脚を持った兵隊が、バレエではアティテュードというんでしたっけ、同じく片脚を高く上げた踊り子のお人形に恋をして、そして最後は二人が共に暖炉の中に落ちて溶けてひとかたまりになった、という、何ともすごいロマンチックな童話なんです。たぶん賢治の片脚はそこから来ているかな、と思ったんで、あくまでもぼくの仮説ではあるんですが、お話しさせていただきました。

そして「いかにも恭一をばかにしたように、じろじろ横めでみて通りすぎます」——つまり、片脚の体でさえ、でんしんばしらはどんどん北へ向かって勤めを果たそうとしているのに、賢治の分身である恭一は、それについていけない。「馬鹿にしたように」というあたりには、宮沢賢治ならではのコンプレックスが色濃く見てとれますね。

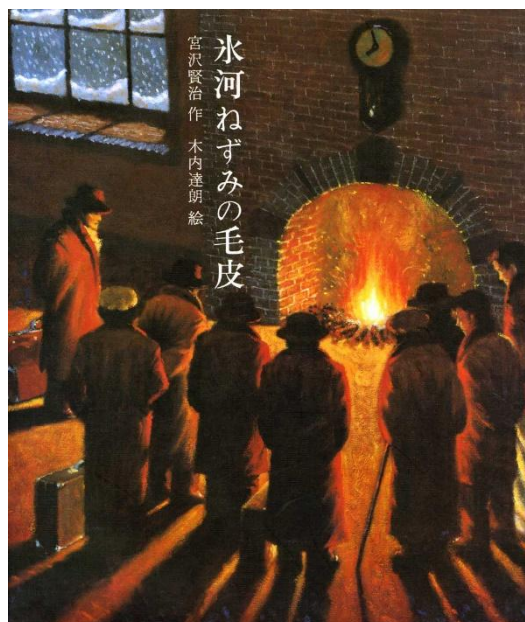
それでも彼はそういう自分を持ちこたえながら歌います。その電信柱の進撃をたたえるために、「ドツテテ ドツテテ ドツテテド…」——これにはメロディーもつけられていますけれど、♪ドツテテドツテテ、ドツテテド／でんしんばしらのぐんたいは／はやさせかいにたぐひなし♪というわけです。宮沢賢治がこの童話を書いた背景がご理解いただけたか、と思います。

② 「氷河鼠の毛皮」

さて、次に行きたいと思います。「氷河鼠の毛皮」は『注文の多い料理店』には入っておらず、ただ『注文の多い料理店』が出た翌年の「岩手毎日新聞」に掲載された完成形の残っている作品です。

これはベーリング鉄道という、東北から北海道、そして千島（クリル列島）からカムチャツカ半島を通過してベーリング海まで伸びていく鉄道——これは、後の「銀河鉄道」の原型になりますけれど——が話の舞台になっています。乗客たちは、何しに行くのかというと、その頃もうすでにワシントン条約でラッコを毛皮として捕獲すること

は禁止でした。それくらいラッコの毛皮は高く売れたので、北の海では乱獲されたんですね。今は水族館にたくさんかわいいのがありますけれど、ほんとうにもう絶滅するんじゃないか、という危機にさらされていたラッコ、そのラッコの毛皮を獲るために汽車に乗って出かけていく話です。ところが突然その急行列車が停車を迫られます。そして、そこに白熊が飛び込んでくるんですね。——「俄に外ががや／＼してそれからいきなり扉ががたつと開き朝日はビールのやうにながれ込みました」。このビールのやうにというのは鮮烈な言葉遣いですよ。ね。「赤ひげがまるで違った物凄い顔をして」、同じ乗客だった一人の人間ですけども、「ピカ／＼するピストルをつきつけてはひつて来ました。／＼そのあとから二十人ばかりのすさまじい顔つきをした人がどうもそれは人といふよりは白熊といつ



た方がいゝやうな、いや、白熊といふよりは雪狐と云つた方がいゝやうなすてきにもく／＼した毛皮を着た、いや、着たといふよりは毛皮で皮ができてるといふ方がいゝやうな、ものが変な仮面をかぶつたえり巻を眼まで上げたりしてまつ白ないきをふう／＼はきながら大きなピストルをみんな握つて車室の中にはひつて来ました」——これは当時の人々ならすぐわかる話です。このベーリング鉄道、それは「シベリア鉄道」を想像させもするわけで、どんだんどんイルクーツクの方に進撃していた日本軍の乗っていた列車、これを赤軍が止めて、そのかわり、日本が作っていたコルチャーク政権という傀儡政府があったわけですけど、彼らはその政府を打倒しながらシベリア全域の掌握をめざしていました。ですからこの同時代の人々がこれを読んだら、当然そういう時代背景をリアルに感じ取ったでしょう。つまり、動物を乱獲するような、ある種の人間中心主義、いまでは「人新生」という言い方も流布していますが、人間が環境破壊の末に世界を滅亡に導いている。この人間中心主義を改めない限り、環境との調和を図らねば、人間を含めてあらゆる生き物が生きる場所を失ってしまうのではないかと、そういう危機にさらされている。そして、そんな人間中心主義に対する動物たちが反逆を試みる。これに、ロシア革命が理念として掲げた資本主義に対する労働者階級の反逆が、透けて見える。百年前の空気、歴史を考えていただければ、この童話の奥深さが、今の我々には無理なく理解できると思います。

ただ、宮沢賢治はご存知の通り、そういう局面で、ただ白熊の側に立とうとするわけではありません。白熊の気持ちもわかる。でもやっぱり寒いから、ラッコの毛皮で身を固めたい、と思う人間の気持ちも無下にはできない。それこそカフカじゃありませんけれども、二つの気持ちが心臓の中でせめぎあっていた。それが宮沢賢治だったんだと、ぼくは思います。

この童話に出てくる若者ですが、白熊と毛皮商人のあいだの仲裁に入るんですね。おかげで物語は悲劇に終わらず救われるのですが、シベリア出兵を身近に感じていた当時の読者は、これを戦争を描いた童話だと、反射的に受け止めただろうと思います。

③ 「鳥の北斗七星」

あと、「鳥の北斗七星」、これもじつに泣ける話です。主人公の鳥は、結婚したばかりで、戦争に行かねばならな

なくなった。ほんとうだったら奥さんも連れて行きたいところ、奥さんだっについて行きたいところなんだけれどそれは許されない。出征兵士は、万一戦場でぼくが死ぬことがあったら、ぼくのことは気にせず、君はまたいい人を見つけて再婚するんだよ、と言って別れる。これは非常にリアルな戦争文学で、与謝野晶子の「君死にたまふことなかれ」——あれは出征する弟に向けた詩ではありますが——をふまえつつ、さらに射程を広げた童話になっています。ともあれ、そうした戦争をイメージさせるような童話をいくつも書いた宮沢賢治のことをまず頭に入れておいてください。

そして次にお話したいのは、そういった具体的な殺傷行為だけでなく、世の中には「構造的暴力」なるものがあることにもメスを入れた賢治文学のことです。

10. イーハトーブと「構造的暴力」——平和学者ガルトゥング——

ノルウェー出身の有名な平和学者として知られるヨハン・ガルトゥングが語っています。彼の本は日本でも広く読まれているんですが、『日本人のための平和論』（ダイヤモンド社、2017）の中で、彼はこんなことを言っています——「それは南ローデシア（現在のジンバブエ）でのことだ。当時、ローデシアはイギリスの植民地だった。イギリスの植民地のなかには、イギリス人が入植する植民地と入植しない植民地があった。私なりの入植という言葉の定義は、家族といっしょに移り住み、農場や店をつくり、数世代にわたって定住することだ。イギリス人はケニアに入植し、ローデシアに入植した。土地が肥え、気候も過ごしやすかったからだ。彼らは先住民たちの土地を奪い、快適に暮らしていた。」

日本が満州に出かけて行ったときにも、似たような気持ちだと思いますけれど、イギリスだってやっていることじゃないか、というのが日本の立場だったわけです。

そして1965年、イギリスの植民地だったローデシアがいきなり独立宣言を行うわけです。ジョージ・ワシントンの時、アメリカ合衆国が独立戦争をして独立したと同じように、白人中心の独立をしようとするわけです。彼らはイギリスとの関係を断ちすべて自分たちでやっていくことを望んだ。これもアメリカの白人たちがやったことと同じです。これに対してイギリス政府は経済制裁を行い、私は制裁の影響を調査するために何度かローデシアに飛んだ。

「初めて現地入りした私に、白人〔・・・〕は、ここは平和な国だと言った。／私はこの時、これを平和と呼ぶのなら、私は平和に反対しなくてはならない、と思った」——つまり、いまや世界で最も有名な平和学者として知られるガルトゥングは、ここローデシアの白人たちが言っている平和、自分たちのところで黒人は非常に従順で文句も言わずに、自分で奴隷奉公してくれているし、殺人はほとんど起こらない、暴動も怒らない、ローデシアは平和なんだ、それを言うなら、ロンドンの方が危ないくらいじゃないか、みたいなことをローデシアの白人たちが言っているわけです。これに対して、ガルトゥングは、それが平和なら、そんな平和なんかいい方がいいというんです。何故か？

「確かに言葉の通常の意味で暴力など存在していなかった、だとすれば、これは何と呼べばいいのか？96%の人々の苦境は社会構造に組み込まれていた。そこで私は、それを「構造的暴力」と呼ぶことにした」というわけです。

実際に殺人や略奪を行わなくても、搾取は起こっている。あるいは人種差別ははびこっている。白人と黒人の結婚なんてありえない。南アフリカ連邦の「アパルトヘイト」とは大差ないような民主主義というのが、このローデシアの政治的風土になっていたのです。しかし、本当の平和を追求するのであれば、人種差別を乗り越えなくては、

黒人も政治に参加し、経済活動に参加し、文化活動でも主導権を握れるような、そういう制度ができあがったところではじめて、平和が実現する。こうやって、ガルトゥングという、新しいタイプの「平和学者」が誕生したのでした。

11. 賢治作品に見える「構造的暴力」

① 「狼【オイノ】森と笹森、盗森」

このことを踏まえて考えると、宮沢賢治の童話は具体的な戦闘行為やら軍隊をイメージさせないようなお話でも、全て構造的暴力を描いている話だと思えるわけです。例えば、『注文の多い料理店』の2番目に入っている「狼森と笹森、盗森」という話があります。これは本当に子どもに読ませたい、宮沢賢治の童話の中でも、「やまなし」に次いで読ませたい。非常にのどかなんですけれども、しかし、いわゆる弥生文化と狩猟採集文化の中で何が起こったのか、どんな衝突が起こりそうになったのか、を考える時に、ものすごくわかりやすい事例を示してくれている話です。

農具を担いだ農民たちが森の中にやってきます。「こゝへ畑起してもいゝか。」／「いゝぞお。」森が一斉にこたへました。／みんなは又叫びました。／「こゝに家建ててもいゝかあ。」／「ようし。」森は一ぺんにこたへました。」というふうに森は最初は全く抵抗しないわけです。

「さてそれから森もすつかりみんなの友だちでした。そして毎年、冬のはじめにはきつと栗餅を貰いました。／しかしその栗餅も、時節がら、ずゐぶん小さくなつたが、これもどうも仕方がないと〔・・・〕大きな巖がおしまひに云つてみました」——話はこうして終わるのですが、牧歌的かと思いきや、その間に起こることは非常に複雑なことでした。農民たちが冬を越して、畑を耕し、農作物を売り買いするんですが、最初の夏に子どもたちがいなくなるんです。

あわてふためいたみんなは、森に向かって叫びます——「たれか童【わらし】やど知らないか。」／「知らない。」と森は一斉にこたへました。／「そんだらさがしに行くぞお。」とみんなはまた叫びました。／「来お。」と森は一斉にこたへました。」

それで子どもを探しに行くんです。すると、狼の森の真ん中で子どもたちを見つめます。「オイノ」というのはいわゆるお犬様という、日本の狼なんでしょう、そういう理解が一番普通かも知れません。しかし、アイヌはアイヌとも言われましたし、東北は大和とアイヌの接触領域だった時代が長かったことを考えると、アイヌとオイノは重なっているともいえるかも知れません（たとえば、「ラッコ」ってアイヌ語から来た名前なんだそうです!）。「狼どの、童【わら】しやど返して呉【け】ろ」というわけです。狼たちは「どうしたらいゝか困つたといふやうにしばらくきよる／＼してゐましたが、たうとうみんないちどに森のもつと奥の方へ逃げて行きました」というわけで、事なきを得ました。

しかし、次の春が来ると、村には子どもが増えては繁栄していくんですが、今度は農具が取られるんです。それでまた搜索にでかけるんです。どんどん森に行ったら、今度も俺たちは知らないぞという。今度は笹森ですね。笹の中に農具が隠してあった。それを取り戻して帰ってくる。

もともと森に棲んでいた狼やら山男やら、そういう先住者は、新しい農法や文化を持ち込んできた人々に、いろんなちょっかいを出していく。そのちょっかいは、ある意味での反発、自分たちの生活圏の中によそ者が入ってきたという反発の顕れともとれるし、逆に新しい人たちと何らかの関係を持ちたくて、おちゃめに盗んだふりをして

関係を作ろうとしたとも言えます。そういうことが二度と起こらないように、農民たちは粟を収穫しては粟餅をこしらえてそのお餅を毎年やるという約束をするわけです。つまり、それまで、ドングリやキノコだけをたべていた先住者は、粟餅を欲しさにいい子にしているわけです。そうやって「構造的平和」が出来上がっているわけですが、果たして先住民たちは、毎年粟餅をもらっているだけでずっと幸せに、自分たちの伝統文化に誇りをもって生きていけたか、非常に難しいところがあると思います。

宮沢賢治が非常に鋭いといえるのは、その粟餅に関して、「しかしその粟餅も、時節がら、ずみぶん小さくなつたが、これもどうも仕方がない」と、話者がではなくて、人類の誕生以前からそこにいて時代の流れを見てきた「大きな巖」に言わせるんです。これはなかなか奥深い。これはどういう意味でしょうか？

こういうことなら、高校生に答えさせてみてもいい気がしますが、ぼくなり解釈では、農民は農民で、先住民からすると新しい文化、しかもたくさんの子どものを養えるような用具を生産できるような、非常に豊かな文化を背負ってやってきた。ところが、その農民にたかって権力を振りかざすような領主階級や武士階級が出てくると、農民は自分たちが作った作物が、ごく一部自分たちが生きていくのに必要なくらいを残してもらっただけで、あとは全部召し上げられてしまう。勝ち組であったかもしれない農耕文化の担い手もまた新しい文明の中では搾取される側にまわってしまう。そういう封建社会との間の溝、その溝に対してどんな策を講じるべきかを考えなければならない、それが宮沢賢治の立場だったと思います。

② 「注文の多い料理店」

それからもう一つ「注文の多い料理店」——これが「残酷童話」なのは、どなたにもおわかりいただけると思いますが、東京からやってきた鉄砲撃ちのような、森の動物たちからすれば情けも容赦もない男たちが、最後にはサラダにされて喰われそうになるところで、危なく命拾いをする話です。注文がたくさんあると思って入り込んだ料理店が、じつはお客に次々と注文をぶつけてくる、そういう言葉遊びなんです。しかも最後に書いてあった張り紙が「さあさあおなかにおはいりください」——ここも言葉遊びになっていて、今の子どもでも誰もかくすつと笑える、本当にすごい名作だと思います。

ここでも、もともとイーハトーブには動物が住んでいたんだけど、そこに西洋式の銃器を持った人たちがどんどん入ってきて、そういう人間がやってくると、森の動物もしたたかで、「ここの山は怪【け】しからんね。鳥も獣【けもの】も一疋も居やがらん」とか、ぶつぶつ言うことになる。そして、幻の「西洋料理店」で冷や飯を食わされた彼らは、泣いて泣いてようやく生き延びて東京に戻るわけです。しかし、「さつき一ぺん紙くづのやうになつた二人の顔だけは、東京に帰つても、お湯にはひつても、もうもとのとほりになほりませんでした」というわけで、これも近代という名の環境破壊みたいなものが、逆にとぼちりとなって人間の側にはねかえってくる。また、これは帰還兵を悩ませるトラウマのことも想像させます。日清・日露の時代からもそうですけれど、戦争に出かけて行った兵士たちが、仮に戦争に勝利を収めたとしても、にこやかに凱旋してくることはめったにないわけです。人を殺すという良心の苦しみがあり、また軍隊の中での差別や体罰に苦しんだり、数々の苦しみを全部引き受けて、何とか生き延びてきた帰還兵——宮沢賢治はそこまで見通していたと言えるのかもしれない。

③ 「どんぐりと山猫」

かねた一郎さま 九月十九日

あなたは、ごきげんよろしいほど、けっこです。

あした、めんどなさいばんしますから、おいで

んなさい。とびどぐもたないでくなさい。

山ねこ 拝

『注文の多い料理店』の冒頭に置かれているのは「どんぐりと山猫」、そして最後に入っているのが「鹿踊りのはじまり」でこの二つは、いずれも牧歌的な、ほのぼのした話のように思えます。しかし、皆さんも覚えていらっしゃると思いますが、「どんぐりと山猫」の冒頭にどんぐり達から手紙が届くんです。「かねた一郎さま 九月十九日／あなたは、ごきげんよろしいほど、けっこです。／あした、めんどなさいばんしますから、おいで／んなさい。とびどぐもたないでくなさい。 山ねこ拝」。

なんと、どんぐりたちの喧嘩を納めてくれるだろう、との期待をもって、下手な日本語でハガキに書いてよこす山ねこですが、「とびどぐもたないでくなさい」とはどういうことかということ、人間は山に来るとき、「注文の多い料理店」の男たちがそうだったように、えてして保身という目的もあるのでしょうか、飛び道具を持参するんです。つまり、頭を下げて「おいでんなさい」と言っても、決して丸腰では来ない可能性がある。それが人間といういきものだ、と思っているわけです。でも、あなたは小学生だからそんなことないだろうと思うけど、念のためしっかり書いとかないといけないな、というわけです。これは「注文の多い料理店」と重ねて読むとよくわかると思います。

④ 「鹿踊りのはじまり」

他方、「鹿踊りのはじまり」は、嘉十という一人の男が腰を痛めて湯治温泉に行こうとしている途中、ちょっと一休みした際に、汗のにおいのする手拭と栃団子を置き忘れ戻ってみると、鹿たちがやってきていて、おいしそうな団子が、でもその隣に変なものが並んであるので怪しむんですね。一頭一頭順番に近づいてきて、それが何物なのか確かめようとする、その動きが今でも民俗芸能として東北で伝わっている鹿踊りの形です。鹿たちがその手拭に何を感じ取っているのかということ、こういうわけです。「何時だかの狐みだいに口発破【くちはっば】などさ罹【かか】ってあ、つまらないもな、高で栃の団子などでよ」というわけで、団子欲しさに近づいたら「くちはっば」——いわゆる地雷ですね——森の動物たちは、人間たちが土の中に危ない発火物をうめこんで、動物を捕まえたり殺したりする、だから用心するに越したことはない、と思っているわけです。つまり、この物語が起こる前に、既に人間がいかにも多くの動物たちに殺生を加えていたか、を物語っています。そして鹿たちが歌うわけですが「のはらのまん中の めっけもの／すっこんすっこの 栃団子／栃のだんごは 結構だが／となりにいからだ ふんながす」。これちょっと調べたんですが、「となりにいからだ」のところは「いー」と音が延びているだけで、隣に体を伸ばしている「青じろ番兵【ばんぺ】」ですから、ちょっと青と白が混じった手拭なんでしょう、その手拭のことを鹿は「青じろ番兵【ばんぺ】」と言っている。とにかく、手拭を武装している人間のように警戒すべき対象に見立てている。このあたり、すべて「構造的暴力」を背景にして物語が進行するんです。結果的に血を流したり、命が奪われたりすることはないわけですが、そういう緊張感みたいなものを丁寧に描く、これが宮沢賢治の手法であり、彼がまさに何が一番乗り越えなければいけない課題だと考えていたか、がよくわかると思います。

⑤ 「やまなし」

最後に「やまなし」ですけど、「クラムボンがかぶかぶ笑ったよ」と片方で言いながら、「クラムボンは殺されたよ」と、この先が続く。この表と裏ですね。これが宮沢賢治の世界観なわけです。水の中にいるカニの子どもたちからすると、魚やカワセミは自分たちにいつ襲い掛かってくるかも知れない外敵です。しかもカワセミに至っては水の外ですから、まったく知ることが出来ない世界から、突然くちばしが突っ込んでくるわけで、それは本当に恐怖するにあまりある事なわけです。

同時に上からは樺（かば）の花が降ってきたり、やまなしがポトンと落ちてきて、時間がたつとそこからよい香りが漂ってくる。川の中にいるカニさんたちにとって、やまなしは、生命に恵みをもたらしてくれるかも知れない落下物です。しかし、上からは自分たちを獲物として襲い掛かってくる敵もやってくる。そういうカニたちの世界観を描いているのが「やまなし」だと思います。

宮沢賢治の話はとても牧歌的な装いを施されていますが、あらゆる生き物が何かに怯えながら生きるしかない、この地球という世界をきちんと見据えて、その命の奪い合いをどのように解消していったらいいのか、戦争に批判的であった以上に、戦争のない世界、「構造的暴力」が解消される可能性、そんなことを考えることも、「従軍」という務めを果たせなかった自分に課せられたもうひとつの課題だと考えていた。それが宮沢賢治だったんだと思います。

ご清聴ありがとうございました。

質疑応答

司会 残酷さみたいなもの、人間の残酷さみたいなもの・・・

講師 人間が一番残酷なんですよ。非人間に対してもね。

司会 今も海外で、世界のあちこちで戦争やってますけど、人間の残酷さというのを改めて考えさせられたと思います。多少時間がありますので、ご質問を受けます。

質問 ご講演本当にありがとうございました。私はお坊さんですので、やはり、宗教、仏教を通しての見方が染みついています。賢治の童話作品の中から宗教性を見出して、仏教徒として伝えていくわけですが、物事においては表裏がある。宗教を避けては賢治作品を語れないと思います。

先生はどんな思いで学生さんに説かれておりますか？

講師 畏れ多いご質問です。西家は代々真言宗で、一人っ子のぼくは、子どもも娘ばかりなので、父親も亡くしたあと、岡山にあったお墓はたたんで、お骨は高野山に預けています。標準的な日本の家庭に育って、お盆にはお墓参りに行くという平均的な日本の仏教徒でした。ぼく自身が70年生きてきて、仏教は宗教としてわかりやすい、かけがえのないものだ、とあらためて思います。人間には様々な罪深さがある。それこそ宮沢賢治が描いているような、殺傷を行ったり、人を騙したり、あるいは怒って人を怯えさせたり、人間の中のそういう罪を自覚することが、死後の安寧にたどり着くただ一つの道だという、そういう意味の道徳主義、これはわかりやすいと思うし、自分の人



講演司会 長澤 直 副会長

生を振り返った時にも役に立った、と思っています。人間の本能、罪深さを乗り越えるために宗教がある。日本だけでなく世界を見ても結構仏教に救いを見出している人は少なくない。これからも仏教界の方々にももっとも世界平和に貢献していただきたいと思います。

ぼくはヨーロッパの人たちのユダヤ教、キリスト教についてもいろいろ勉強することがあって、人間ほおっておくと、とんでもないことをやりかねない、というのが宗教誕生のおおもとにあるのは確かです。モーセがエホバの神から十戒を授かるというのは、まさにほおっておくと人殺しや姦淫やらしかねないからですね。ただ、ユダヤ教が仏教と違うところは、戒めを破ると天罰が下るぞ、という言い方をすることです。仏教にも「閻魔様に舌を抜かれる」みたいな脅しが混じっているのも良く知ってますけど、ユダヤ教の場合にはもっとはっきりしていて、神がずっと見張っている。仏教もユダヤ教も戒めの中身はあまり変わりませんが、一神教を旨とするユダヤ教やキリスト教やイスラム教に対して、一人の仏教徒として思うのは、一神教の場合には「制裁」という行為が宗教によって正当化される。つまり、「悪は叩きのめすべきだ」という考え方が宗教の中にうめこまれていて、それを理由に行動する。今次のイスラエルの戦争もそうですね。ナチス・ドイツがユダヤ人にやったことをなぞっているかのようでもある。だから、ぼくは宗教に期待するところ、宗教の恐さとを、両方考えあわせて行かなければならない。そう思っています。

「本稿は2024年9月21日 PM1:00~2:00、比叡山延暦寺での賢治92回忌記念講演の内容に、加筆・修正を加えたもので、2024年12月11日発行の関西岩手県人会報・イーハトーブ56号特別寄稿です」

西 成彦 講師のプロフィール

昭和30年(1955) 岡山県生まれ・兵庫県出身
昭和52年(1977) 東京大学教養学部フランス科卒業
同大学人文科学研究科・比較文学比較文化・博士課程中途退学
ポーランド留学・熊本大学助教授
平成9年(1997) 立命館大学文学部教授
平成15年(2003) 立命館大学先端総合学術研究科教授
平成27年(2015) 日本比較文学会々長(2019まで)
令和2年(2020) 立命館大学先端総合学術研究科同研究科特任教授
同年 同大学名誉教授

受賞

平成6年(1994) 熊日文学賞『ラフカディオ・ハーンの耳』
平成9年(1997) 宮沢賢治賞奨励賞 『森のゲリラ宮沢賢治』におけるユニークな発想
平成10年(1998) 日本比較文学会賞『森のゲリラ宮沢賢治』
平成17年(2005) 芸術選奨新人賞『耳の悦楽—ラフカディオ・ハーンと女たち』
令和元年(2015) 読売文学賞『外地巡礼—「越境的」「日本文学論」』

著書

平成5年(1993) 『ラフカディオ・ハーンの耳』岩波書店

- 平成9年（1997） 『森のゲリラ 宮沢賢治』 岩波書店
平成16年（2004） 『耳の悦楽—ラフカディオ・ハーンと女たち』 紀伊國屋書店
平成30年（2018） 『外地巡礼—「越境的」「日本語文学論』』 みすず書房
令和4年（2022） 『死者は生者のなかに 「ホロコースト」の考古学』 みすず書房
令和6年（2024） 『カフカ、なまもの』 松籟社
その他 多数



第60回関西宮沢賢治の会（賢治92回忌）法要

2024年9月21日



焼香の様子

延暦寺会館 瑞宝の間